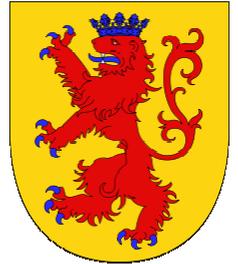


ハプスブルグ家が東京にやってきた

—「ルドルフ 2 世の驚異の世界展」を拝観して—



何事が起ったのだろうか。渋谷の文化村に、突然あのハプスブルグ家の驚異の人であるルドルフ 2 世（1552－1612）が現れたのである。それも何世紀も飛び越してである。



1. ルドルフ 2 世とは：

江戸時代に遡ると訳が違ふ。ハプスブルグ家は中世から 20 世紀初頭まで、約 650 年という類のない長命を保った。その間神聖ローマ帝国の皇帝位を略独占、ヨーロッパの中心に位し、周囲の国々と婚姻政策で、領土を拡大し、時代をリードしたヨーロッパ史の核であり続けたのである。その長さや巨きさや輝かしさの中で、人物も、事件も入り乱れて波乱万丈であった。

その中でも、華やかな人物は、カール 5 世、マリア・テレジア、マリー・アントワネット、エリザベト皇后、フェリッペ 2 世、マリー・ルイーズ、マクシミリアンなどが錯綜した世界を繰り広げ、限りないロマンを掻き立て、ヨーロッパの歴史の中心にいたような印象であった。

東洋とは無縁であったハプスブルグ家の歴史の中で、今回東京に現れたのは華やかに活躍した誰彼でもなく、一族の中で最も変わり者と言われたルドルフ 2 世であった。

どうしてか？「ルドルフ 2 世の驚異の世界展」にて展示された 16 世紀、17 世紀のハプスブルグ家の、眩いばかりの文化の光芒を肌で感じ啞然たる思いで納得した。

稀代のコレクターとして、芸術作品、最新科学機器、珍しい創造物などの膨大なコレクションを形成したルドルフ 2 世は、ヨーロッパの歴史の変容する価値観の中で、あたかも“文化功労者”として変貌した姿で現れたのである。

それは同 2 世が政治的には無能で奇人扱いを受けて来ていたが、近年、変わり者ながら、「最高の知性を備えた教養人」且つ「学問と芸術の庇護者」とも言われるようになってきた実態が良く理解できる。

その実証となったのは J. アルチンボルドの 1591 年の名肖像画「ウエルトゥムヌスとしてのルドルフ 2 世」である。絵そのものがルドルフ 2 世の才覚や驚異と言われる人物像を見事に描いている点である。又彼は、ウィーンの自然史博物館に当時の有能画家の名作を収集する等、沢山の文化遺産を残してくれたのである。

一方、これだけの長期にわたる権力と治世を保ったハプスブルグ家の歴代の皇帝の遺構が存外少なく、その肖像画に於いては殆ど残されておらず、あのマリア・テレジアのこれといった肖像画すら見当たらない。

2. 「ルドルフ 2 世の驚異の世界展」について

ルドルフ 2 世は莫大な財力と権威をもって、政治をそっちのけにして、森羅万象を手にすることに生涯を費やした人物である。収集作品 3,000 点の中から 120 点の公開である。

政治の中心であるウィーンを避けて、首都をプラハに移し、プラハに芸術家、科学者、錬金術師などを集め、プラハをヨーロッパ最大の文化の中心都市にした。

それもあって、出展は、ハプスブルグ家ながら、プラハ国立美術館、エステル・ハージー財団、コルトレイク市美術館（ベルギー）、スコーククロステル城（プラハ）から幅広く集め、ウィーンだけでは見られない貴重な展示と言える。

16, 17 世紀のハプスブルグの微細な表現と芳香の一面に触れられた感じである。

時代環境としては、マルチン・ルターの台頭でプロテスタントとカトリックとの葛藤の時期であり、政治的には難しい環境でもあった。

その環境を横目に、プラハでルドルフ 2 世が活動した時期は、美術史的には、ルネッサンス盛期とバロックの合間に当たる、マニエリズムと云われた「自然を凌駕する行動の芸術的手法」を持った目新しいものであった。それは、ルネッサンスで培われた思考と技術の融合された様式の上に、自然の中に美しいものを繋ぎ合わせ、より美しくさせようとした芸術家たちの工夫が、時代を彩ったのであった。



ルドルフ 2 世が、選んだその芸術家たちの絵画が今回数多く提示されている、その画家たちは、ジュゼッペ・アルチンポルト、ルーラント・サーフェリー、ハンス・フォン・アーヘン、ヤン・ブリューゲル、（父・子）、ルーカス・ファン・ファルケンボルフを始めとして、同質の数多い芸術家の作品が、文化村に華やかにお目見えしたのであった。

おかげで、ヨーロッパの芸術文化の流れを横から覗き見でき、想像以上の深さと厚みに改めて感じいった次第である。

（平成 30 年 3 月 20 日 久津正行）

